

## 【書籍自己紹介】

### 『地域おこしと文化財』

笹本 正治

『地域ブランド研究』を発刊していく最大の目的は、地域文化を創成し、熟成させることによって、住民の心と財産を豊かにし、地域の活性化を図ることにあると考える。『地域おこしと文化財』を刊行したのは、まさにこのこととつながる。私は「まえがき」に以下のように記した。

私たちの社会は未曾有の転換期にあります。様々な局面で、これまで推し進めてきた社会制度や、私たちの日常生活・価値観にほころびが見えてきました。

日本国は毎年膨大な国債発行によって何とか財政をやりくりしていますが、その借財は私たちの子どもや孫の肩にのしかかります。私たちが約束されていたはずの退職金や年金すら当てにはならなくなりました。国民の税金をあれだけつぎ込んだ銀行、毎年膨大に支出されているアメリカ軍への思いやり予算、国土を切り裂いて建設される道路、これらに対して効果の検証や責任の追究はほとんどの



されないままに、財政支出が進んでいます。

何よりも戦後の日本の発展を支えてきた平和憲法すら、自衛隊のイラク派兵によって踏みにじられようとしています。しかもこれを論議した国会の実のいないこと、きちんとした説明はなされないままに政府の案が、多数決で承認されました。国民の代表者である議員たちの何と無責任なこと。

私たちのまわりでは十分な住民の立場からの議論や合意なしに市町村合併が推し進められ、学生の立場を考慮することなく大学が独立行政法人化しようとしています。

何かというと予算のことだけが語られ、将来の日本や地域をどのようにしたいという長期ビジョンが示されません。それは国だけでなく、市町村でも同じだと思います。そのような中で、お金にならないと目されている文化財行政は、お先真っ暗というのが実情です。

長野県の文化財行政はその典型で、県が文化財に対して投ずる金額は県の広さ、文化財の多さなどを考えてみると、近県に比較しても恥ずかしい限りです。

予算効率だけが問題にされる中で、地方やそこに息づいてきた文化は切り捨てられても良いのでしょうか。そんなわけがありません。

私たちはいかにして未来を切り開いていくべきか、今こそ真剣に考える時期です。まずは、私たちが住んでいる地域をいかにしてよくしていくか考えねばなりません。その際に材料になるのは過去でしかありません。これから地域が真に元気になるためには、地域に残る文化財を、本当の「財」として認識し、活用していく必要があります。

私はこれまで長野県内各地で、地域文化の認識を通して精神的に豊かになろうと訴え続けてきました。本書にまとめたのは各地で話す機会を得た講演の一部です。

地域を起こすとはいったいどういうことなのか、現在に生きる我々

にとって未来とは何か、少しでも考える材料になれば幸いです。

私は1992年6月より2004年5月まで長野県文化財保護審議会委員（このうち2002年より辞めるまでは会長）、1996年10月より現在に至るまで山梨県文化財保護審議会委員を務めている。関わっている国史跡の整備事業だけでも、甲府市の武田氏館跡、韮崎市の新府城跡、高遠町の高遠城跡がある。この他、山梨県立博物館建設や飯山市のふるさと館の建設などにも参加している。こうした関係もあって、文化財の保護や活用に結びつく仕事をしてきた。その際に実感してきたのは、多くの地域でその保護などを通じてさまざまな制約が設けられるため、文化財はお荷物であり、邪魔なものだとする人々の意識であった。彼らの考え方に転換をはかるために、私が長野県内で話した文化財などに関わる内容の講演をまとめたのが本書である。

ここで主張したのは、地域が歴史を通じて育ててきた文化財を勉強し、地域の宝物として認識し、これをお荷物としてではなく、地域を起こしていくための「財」にしようということである。目下のところ多くの地域ではせっかくある文化財を、地域活性化の役に立つ宝物、資源として認識していない。逆に文化財で地域おこしをとかけ声をする市町村では、短期的な目標だけが作られ、かえって文化財の価値を損ねるような計画が多い。しかし、地域が発展していくためには過去をしっかりと確認し、その上に現在を見きわめ、遠くの未来まで見据えていくしかないのである。

日本人は多くの場合、歴史的な積み重ねの意識に欠ける。これは、年末まで借金に追われても新しい年は新たなものとして良いことが来ると考え、十二支で一回りするといった循環的な歴史に慣らされ、さらに元号という積み重ねを実感させない年号意識を当然のこととしている点にもうかがえる。この点は戦争責任論などでも見え隠れしてい

る。しかし、文化財は積み重ねが大きな要素になっている。

過去と未来の連関の中で今を考えるに際して、地域が持っている最も重要な教材こそ文化財なのである。しかも文化財は、現状で国宝や重要文化財指定されているもののみが重要なだけでなく、地域の特性や歴史、今を知りうるすべてが文化財たり得る。何が大事かを認識し、それを保護していくこともまた地域活動なのである。その意味では地域の言葉も、食事も、それを支えている野菜も、周囲のありとあらゆる事が文化財から成っている。したがって、市町村においては国と同じ尺度で文化財を決めていくだけでは意味がない。地域にとって何が本当に重要かを考え、独自に文化財の指定して、それを通じて学んでいくべきなのである。

地域の特性が認識され、そこに歴史の重みや、維持することの重要性が共有されれば、それだけでも大きな意味を持つ。地域住民が地域を認識することは地域に対する誇りにつながってくる。現在過疎化が進んでいるような地域では、ふるさとに誇りが失われ、地域に対する愛情が欠落しかかっている。目前のお金以上に大事なものがあることをしっかり認識し、横につながって地域文化を維持し、成長させていけば、それだけでも地域は大きく変わってくる。

このところ学生とともに祭を見に行く機会が増えた。長野県の各地にはそれこそすばらしい祭が数々ある。そうした祭が地域に息づいているところでは、祭や文化に対する誇りがあり、その活動自体が地域住民を結びつけている。祭の継承を通じて年配者と若者が話し合い、祭りの際の食文化が維持されている。祭に際しては親族が集まり、近況を語り合う。集落ごとに行われている祭こそ、地域にとっての文化財の一つであろう。ところが多くの人は、その祭を隣の集落の祭と比較しなければ、それがいかに素晴らしいものなのかも語らない。ひたすら維持が大変だとしかいわない。ところが、私や学生がその祭を

見て感激し、これは素晴らしいというだけでも、地域の人たちは喜んでくれ、祭が活性化してくる。それがそのまま、地域認識にもつながっているのである。

学問が本当に有用なものであるならば、我々は様々な形でこれを育んでくれた人々や地域などにお返しをしていかねばなるまい。歴史学を専攻する私としては、このような活動も一つの恩返しだと考える。信州大学人文学部は地域貢献に努力しているが、その実態の一部が本書にも示されている。

(ささもと・まさじ／信州大学人文学部教授)

(2004年9月23日刊行、ほおずき書籍、全263頁、1,700円+税)